杉並区立
浜田山小学校

はまだやま

学校だより　第541号
令和２年度　　７月号

校　長　　伊勢　明子
副校長　　森賀　慎一

学校でできる非認知能力の育成

副 校 長　森賀 慎一

学校再開から約一か月が過ぎました。分散登校から一斉登校へと段階を踏んで、子どもたちが学校に戻ってきました。まだまだ感染予防に手を抜けないところですが、子どもたちに「新しい生活様式」を意識させ、学校内外でも自分で考え判断しながら適切な行動ができるよう指導・支援していきます。

また休校期間中の学習の遅れを取り戻しつつ、友達と共に学ぶ楽しさや一緒に過ごす喜びを味わえることが学校のよさと捉え、潤いのある学校生活に向けて教職員一同、工夫や努力をしてまいります。

さて、表題の「学校でできる非認知能力の育成」ですが、学校だより５月号の巻頭言で「家庭で育てたい非認知能力」という原稿を書かせていただきましたので、では次に学校で非認知能力の育成に向けて、どんなことができるのだろうと考えてみました。

参考にしたのは、ポール・タフという外国人のフリージャーナリストが書いた「私たちは子どもに何ができるのか～非認知能力を育み、格差に挑む～」という本です。この本は子どもの貧困が、一生の財産になる非認知能力を獲得する機会を奪ってしまうという危機感から書かれたようでした。

この本では、まず「非認知能力」とは、教えたり、測定したり、鍛えたりできるような学習スキルではなく、学習している現場の環境に大きく左右される習慣やものの見方と定義付けています。また「学習を行うための粘り強さ」という言い方もしています。では、その環境をどう学校で整えたり、粘り強さを育てていったりすればよいのかを考えました。

教室で教員が行っていることは、大きく分けて主に２つあります。１つは生活指導を含めた「学級経営」、もう１つは「学習指導（授業）」です。学級経営では、一人一人の子どもたちが所属意識をもてること、自分の居場所があると実感できたり友達や先生から認められていると感じられたりすることが大切ではないかと思います。そういう教室の環境づくりが行われていれば、子どもたちは自然と自尊感情や自己有用感が高まるのではないかと感じています。

学習指導では、一人一人が自分で取り組むべき課題を選択できる場面があることが大切だと考えます。自分で決めたことだからこそ主体性や粘り強さが発揮されるはずです。そしてその課題が今もっている力より少し難しいと、やる気も高まり達成感を得られやすいのではないかと経験的にも感じています。

浜田山小学校の各教室では、この学級経営と学習指導の２つを大切にしながら、子どもたちの非認知能力を引き出し、育んでいきます。学校公開等で授業や学校行事をご覧になられる際には、ぜひテスト等の数値に表れる認知能力とは別に、これからの時代を生き抜く上で重要となってくる様々な非認知能力の育成という視点も合わせて、ご覧いただけると幸いです。また今後は、早稲田大学教育学部、河村茂雄教授監修の「Q-U」を活用した非認知能力と学級経営調査等も活用していく予定です。

with コロナの時代に新しい生活様式を身に付けさせつつ、これからの時代に必要な力をしっかりと学んでいける学校づくりを進めます。引き続き、ご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

７月の生活目標「新しい学校生活様式を身に付けよう」

６月から登校が始まり、１学期の間はこの生活目標です。新しい学校生活様式を知り、なぜそうするのかを考え、慣れることを目標にしてきました。７月はあたりまえになるように、友達と声をかけ合いながら、新しい生活様式が定着するとよいと思います。挨拶や礼儀、登下校の交通安全についても声かけを続けていきます。マスクやマスクを入れる袋、ハンカチや汗拭きタオル等のご協力に感謝いたします。